

信じる者は救われる？

小 田 な ら *

厳しい日差しがジリジリと皮膚を焼こうとも、霧雨の雨粒が視界を遮ろうとも、夫婦が乗るバイクは進んでいく。ハノイの市街地から北へ2時間半、大きな高速道路、2車線の国道、未舗装の道路、水田のあぜ道を通ってようやく集落の診療所にたどり着いた。診療所はガラス張りの大きな引き戸の建物で、建てられて間もないようだった。軒先には「長寿の LT 翁」「不妊、子どもがでにくい男女へ…」と看板が掲げられている。私は、この夫婦が不妊治療と男子産み分けて評判の良い伝統医学の診療所に通い始めておよそ3ヵ月後、かれらの診察についてきた。

かれらは結婚してから5年が経とうとしているが、子どもはまだいない。夫婦の妻の方は、理系の大学を首席で卒業したエリートで、夫は家の近くで小さな会社の経営に忙しい。妻の実家にはハノイで大学教員を務める父と（ベトナムでは珍しい）専業主婦の母、弟がおり、特に父母は孫の誕生を心待ちにしている。かれらは優等生らしく、科学的根拠のない医療は効かないし、やっぱり頼りになるのは西洋の医学や外国から入ってきた薬だ、加持祈祷で治してもらうなんて迷信、もってのほかだ一と言う。しかし、だからといって父母は実家の田舎で伝承されてきた薬草の知識や、先祖のお墓を建てる日和を

占いで決める習慣を完全に捨ててはいない。「ちゃんとしたきれいな病院で、ちゃんとしたお医者さんに診てもらわないと」と言うものの、自分の子どもがなかなか妊娠しない一となれば、話は別である。孫がほしいという個人的な感情と、子どもがいなければ一人前ではなく長男が必要だという文化的なプレッシャーのもとで、ここ数十日、家の台所では調合された伝統薬を煮出す香りがずっと漂っている。

話を診療所に戻そう。かれら夫婦は子どもを授かりたい一心でここにやってきた。しかし、いったい効くのだろうか一という疑念ももっていることが会話の端々からうかがうことができる。入口にバイクを止め、引き戸を開いて中に入ると、向かって右手にはベトナムをはじめ中国や韓国の伝統医学の診療所でよくみられる木製の薬棚や薬瓶が並べられ、大きな作業机が置かれている。薬棚の小さな引出しそれぞれには漢字で薬の名前が書かれており、棚に並べられた大きな薬瓶には薬の名が漢字とベトナム語で記されていた。部屋の左側にはゴザを敷いた寝床が置かれ、木製の応接セットが中央正面に並んでいる。まず患者らはここに座り、診療所の主を呼ぶ。奥から小柄で年老いた、しかし血色のよい翁が登場してきた。挨拶を終えると、翁は夫を応

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 診療所は一見、普通の家ようだ



写真2 壁には翁の先祖や自身の写真を飾っている

接セットの傍にある小椅子に座らせ、脈を診る。「どうですか？」との問いに、「うむ…」とつぶやきながら、しばらく静かに夫の左右の手を順にとり、脈診する。

この翁は94歳だが顔に皺はほとんどなく、白い肌は紅色に高揚していて艶がある。背中が少々曲がっているものの、足どりは軽い。翁によれば、かれは12～14世代前にゲアン省から移り住んだ一族の末裔で、この集落には300年前から家があるという。代々、薬についての知識を伝えてきた一族に生まれ

た翁は、12歳の時より実の父親から漢字や伝統薬について学んだという。60代で定年を迎えるまでは学校の教員として働いていたが、現役時代は並行して家伝の知識によって治療もおこなっていた。つい十数年前から診療所を新築し、治療を専門におこなうようになった。現在は、同じように家伝の知識を引き継いだ60歳をすぎた息子が診療所を手伝っている。

「君はもう、薬はいらないよ。（妻の方を向き、）さあ、脈を診よう。」翁は妻の脈をとった後、薬を調合するために薬棚へ向かった。「おじいさん（先生）、私だけ飲まないといけなの？」妻のグチを聞きながら、薬を調合していく。

ここに限らず、どの伝統医学診療所でも薬を調合する手順は同じだ。まず、茶色い正方形のやや厚い紙を薬の包みの個数分、作業台の上に敷く。だいたい、1包で3日分の飲み薬を煮出すことができるので、たとえば15包つくれば45日分の薬となる。次に薬瓶や薬棚の引出しから薬を取り出し、1種類ずつ順に包紙の上に少量ずつ置いていく。この時、薬の分量は目分量で測り、調整していく。これを繰り返す、すべての薬を並べた後、立方体の形に収まるように包紙を織り込んで輪ゴムでとめる。薬を調合する処方箋は、医者によって異なる。処方箋をあらかじめ書いて確認しながら薬を選び取る医者もあるが、この翁は何も見ずにあっという間に16種類の薬を並べていった。息子によれば、この翁の場合は基本の処方に独自の薬を加えるため、より効果が出るらしい。この診療所



写真3 この作業台の上で薬を調合する

には、土日になると中国国境沿いのランソン省など、遠方からはるばる患者がやってくるという。評判はもっぱら「口コミ」で広がっていく。

できあがった薬は15包。かさばる包みをビニル製の買い物袋に入れ、バイクにくくりつけて持ち帰る。何でも単刀直入に聞く妻が「本当にこれで（子どもが）できるの？」と翁と息子に聞くと、「今年中だな」と息子が返す。「長すぎるわ!」と言いながらも、妻は期待を捨てていない。母親も、「あのおじいさんの薬を飲み始めて、知り合いの45歳の女性が妊娠したのよ。あと、男の子をお願い、と言えさうなるように薬をつくってくれるそうよ」と、後に期待を込めて私に語った。

さて、このように家伝で営まれている伝統医療は、近代医療で治療しきれないときに頼る場合が多いようだ。つまり、代替・補完的に、あるいは最後の手段として伝統薬を試してみるのである。翁のところへ通う夫妻も、はじめは近代医療の病院で検査を受けていたが、うまくいかなかったという。もうひとつ、最後の望みとして伝統医療を試す例を挙

げたい。

私の家の近所に住む高齢の女性は、妹が末期のガンに侵され、病院で治療を受けさせていた。病院ではびこっている「わいろ」の習慣を仕方なく受け入れ、熱心に少しでも回復することを願っていた。しかし、とうとう何も手の施しようがなくなり病院にもいられなくなった際、少数民族の薬に詳しい女性の薬が効く—という情報を聞き、その女性は娘とともに一日がかりでハノイの隣の省へ出かけていった。ハノイからタクシーを一日借り上げ、ハノイから西に隣の省へ向かう。少数民族の多く住む地域として観光地化された地域からさらに山の方へ進むと、畑が広がり土間づくりの木造の家が点在するところへ出た。小さい丘の上にある家に、薬草に詳しいタイ族の女性がいう。

家へ入ると、女性とその夫がお茶で迎えてくれた。土間の家の中央は舞台のように一段高い部分があり、そこが寝床となっている。庭へ通じる裏手には、乾燥させた薬草が並べられている。薬草の名前を記したものは何もなく、すべてはこの女性が知っているのだらう。ハノイの女性はあらかじめ妹の症状を携帯電話で伝えていたので、すぐに薬の準備にとりかかっていった。薬を包んでいく手順は、翁の場合と同じであった。

実はこの女性の父方の祖父は中国人、父方の祖母は白タイ族である。薬草に関する知識は祖父母両方から受け継いでいるのだらう。この家もやはり「口コミ」の力が強く、タインホア省やゲアン省といった遠方からも患者やその家族がやってくる。



写真4 取ってきた葉草は庭先で干す

葉の包みを受け取った後、ハノイへ戻った高齢の女性はすぐに妹の住む家へ直行し、葉を渡した。郊外での加持祈祷も頼み、何度か通ったという。しかし、結局妹はしばらくして亡くなった。

1年半を越える私のハノイ滞在も終わりに近づいたころ、友人が「面白い場所に連れて行ってあげる」と、遠出に誘ってくれた。バイクでハノイからひたすら東へ向かう。3時間ほどで、ようやく目的地の村に到着した。その村は、何の変哲もない水田の中に集落が二つ三つ集まったところであった。古い土堀にレンガで補強した壁伝いに、「このおじさんの家はどこだい？」と村の子どもたちに尋ねながら、ある一軒の家にたどり着いた。迎え出てきてくれた初老の男性の家の居間には退役軍人であることを示す賞状のほか、つたない漢字の掛け軸、派手なイルミネーションがついた観音立像、先祖への祭壇が並んでいる。いったいここはどこかと友人の様子をうかがうと、友人は小声で説明し始めた。「このおじさんは、特別な能力があるんだ。人の人生すべてを丁寧に占ってくれる。」



写真5 葉はこのように分けられている

この男性は、中年になってから人相・手相・四柱推命を勉強し始め、観音の啓示によって人の一生を占うことができるようになったという。私の髪の毛の生え際、耳の形、目、などを見た後、こう言った。「君の実家の隣には、小川か堀があるだろう？それから君は、お金は入ってくるけれどもためることができないだろうねえ。どうしてって？耳たぶが、内側を向いていないからだよ。」およそ2,000円で（ベトナムの物価からいえば高額）、人生のゆくえについてノート1冊分を書き記してくれるそうだ。

ベトナムでは1975年以降の社会主義政権下、迷信行為は一切禁じられてきた。しかし近年、なかなか見つからない戦没者の遺骨が霊能力者の力によって見つけられるなど、かつて禁じられていたものも表立って利用されている（もちろん、これに便乗したいかさま霊能力者も続出した）。また、伝統医療をおこなう医者は医療行為を認める免許をもつことが定められているが、そうでなくとも経験に裏打ちされた力や口コミを信じ（ようと）、最後の望みを求めて遠方から人々が集

まる。どのような大義名分によって抑えられていようと、苦しい現状を打破する希望をもちつつける術をもつ一数々の場面で、私は人

間として当然で大切なことを改めて実感したのであった。

ジュガード・ソリューション

―場当たり的なような、ひとつの知恵のような、思い込みを取っ払う言葉―

川 中 薫*

2009 年からデリーのアパレル生産企業を中心に、アパレルやテキスタイル関連の生産現場を訪れる機会をえている。おもに北インドの地域で、見に来てもいいよといってもらえるたびに、ほいほいと出かけていく私である。

8 月、毎年のように訪れてお馴染みになっている企業に、半年ぶりに顔を出した。本生産がはじまる冬にむけて、サンプル生産をしているところである。

「こんにちは、元気だった？」といって顔を出すと、「おお、よく来た。まあまあ、座れ、座れ。どうだった、元気だったか、家族は元気か。チャイを飲むか」と、どのフロアでもまずはマネジャーやマスターが、そして馴染みのメンバーが次々に話しかけてくる。ここは小規模の会社で、たいていの情報はすぐに誰かが伝達して、次の場所では話が早い。私のヒンディー語もすこしは上達したのかなと幸せな錯覚を覚える初日である。

各フロアをひととおりまわって 2、3 日もすれば、すっかりお客さんではない私には、11 時から 15 分間と 16 時から 15 分間のチャイ休憩時に、マネジャーやマスター用の余りがあれば飲むかと聞いてくれる。このお茶休憩と 13 時から 30 分間の昼休憩を合わせた 1 時間、フロアの電気と動力を消すので、普段鳴り響いているミシンの音も静まり、布地をバタバタして巻き上がる埃に悩まされることもない。ごろんと屋上や部屋の隅で横になったり、ひとり黙々とお祈りを捧げる人がいるかと思えば、ベルの音と同時に階段をかけ降りて外に行き、タバコを吸いながら話をしたり、お茶を飲んだりする人もいる。このときは、隣近所の工場やオフィスも休憩時間で、急に道端に人が増え、通り沿いの小さな露店がにぎわう。

隣の建物の地下にある企業と 2 軒隣の工場は同じようなアパレル会社で、向かいの布地の工場、裏の建物はアパレル輸出促進関連

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科